SEISYUNSHINSYO

桜　田　門

定価　280円

1957年11月1日　発行

著者　柴田錬三郎

発行者　和田孝三

発行所　株式会社 青春出版社

東京都文京区茗荷町83番地

振替　東京98602番

印刷所　弘済印刷株式会社

桜

柴 日

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

デスマスク……五
狂者の相……七七
死者の唇……一〇一
桜田門……一三五
背徳者の手記……一四三
白夜の果て……一六七
善魔の窖（あなぐら）……二〇一
あとがき……二三六

デスマスク

一九五一年――月――日

この日、一人の似而非ダンディイが、自殺に成功した。

黒田幸太郎。享年三十才。職業は文芸評論家――というより無職にひとしかった。

*

彼は、今、息絶えたおのれの形骸から、そっとぬけ出して、部屋の片隅に、ひっそりとうづくまっている――いや、彼は、もう影もかたちもないのだから、どういう恰好をしているか、彼自身にも見当がつかない。にも拘らず、彼はまだなまの実体感をもって居り、そのなかに物倦い疲労をみたしている。

十数本の強心剤を注入されてのたうちまわった断末魔の苦しみが、この疲労をのこしたのであろうか。それとも、これは、三十年の泥まみれの人生を今やっと終えたという虚脱感がもたらしたものなのか。それは、彼自身にも分明ではない。

いずれにしても、彼はおのれの形骸をとりかこんで長い時間おしだまっている彼の妻と、彼の愛人と、彼の親友の様子を、その気だるい疲労感特有の冷やかさで眺めている。いや三人の様子のみならず、おのれの形骸に対しても、彼は、遠い他人めいたまなこを注いでいる。

彼はいつか、退屈な時に、仰向けに寝そべって、手鏡に額を映し乍ら、いったい息絶えたらどういう面つきになるんだろう、と滑稽な努力をはらってみたことがあるが、鏡を瞶めるというひとつの表情に邪魔されて、目的を果さなかった。だが、今は、デスマスクは、白布に掩われているにも拘らず、彼は、その白布の下で、白い蛆が湧いて、静かに蠢くさまを……いや、この想像は、死顔が見えない

ために、かえって容易なのであろう。

彼が、自分自身をとりもどした時、死顔は、すでに白布で掩われていたのである。

しかしさっき、彼は、ちらりとおのれの死顔を見ることが出来た。それは、幸いなことに、彼に不快なショックを与えるかわりに、アトリエにころがっている石膏像を思わせて、彼をほっとさせたのであった。

彼の愛人の金杉彰子が、この部屋に入って来て、枕元に坐るか坐らないうちに、妻の尚江は、なに思ったか、無言で手をのばして、ひらりと白布をとりはらったのである。金杉彰子は、一瞬、大きく眸をみひらき、凝固させ、死顔を瞶めたが、たちまち、唇をわななかせると、うなだれてしまい、嗚咽を殺して肩を顫わせはじめたのである。両手を膝にかさねたまま、無言で哭くその様子は、しかし、尚江の冷酷な眼眸になんの反応も与えはしなかった。尚江は、静かに死顔へ白布をかけると、今までそうしていたようにふたたび部屋の一方を凝視したまま、身じろぎもしなくなったのである。

彼の形骸を、時折、じろりと見やるのは、親友の掛川である。掛川は、平常の人柄をそのままに端然と正坐し、かすかな嫌悪を交えた冷淡な表情を泛べている。が、しかし、彼の方は彼の方でその表情に対していささかの軽侮をおぼえないわけではない。なぜならこれは、彼が、しばしば見かけた表情だからである。しかし、その時と場所が、まったくちがっていたことが、皮肉な記憶として、彼の脳裡にきざまれている。例えば、若い文学青年が、さる外国の高名な小説の作者の名をまちがえて口にするのをきいた時……若い女性が、重い荷物をさげて電車に乗ろうと苦しげに走るのを目撃した時……、彼の家にやって来て、夫婦喧嘩を見せつけられた時……、掛川は、この表情を泛べたのである。

彼は、その表情の乏しさが、掛川を女性と縁のないわびしい生活に追いこんでいることを知っている。

——掛川、よせ！　そのつまらん表情を。

と、彼は、にがにがしげにはき出したくなる。

それにしても、この部屋の長い沈黙は、いつまでつづくのであろう。

つい、さっきまで通っていた省線電車の音もやんだ。柱時計の音ばかりが高くなって来ている。針はちょうど一時をしめしている。

こうも重苦しい無言の行をつづけていては、これを最初にやぶる人間は、よほどの勇気を必要とするに相違ない。ところが、三人のうち、誰も、この沈黙をやぶる効力をはらおうと考えている者がない、とあっては、おそらく夜が明けるまで、この部屋は、寂寞としているのではないか。

実は、三人とも、すこしも無言ではいないのだ。彼は、三人が肚裡でつぶやいている独白を——彼という人間に対しての独白を、先刻からきいている。

だから、彼にとって、その三人三様の独白をききわけるためには、この部屋の底知れぬ静けさが、かえって好都合なのかも知れぬ。

その妻の独白

この人は、気ちがいだった。嘘つきで、小心で、自惚れ屋で、五年間わたしをなぐりつづけた。文

字通りわたしをなぐりつづけた。わたしは、この人が気ちがいであることを、誰にも訴えはしなかったし（訴える人もいなかったし）この人が逝った今となっては、猶更もう誰にうちあけようとも思わない。

わたしは、この人になぐられた痛みを、からだのどの部分からでも甦らせることが出来る。

結婚してはじめてこの人が暴力をふるった日のことを、はっきりとおぼえている。この人は、あの甚しい食糧難時代にも拘らず、麺類をたべなかった。それを忘れていたわけではなかったが、闇米を買いそこねたので、その日だけがまんしてもらうつもりだったところ、いきなり茶袱台をひっくりかえされて、頬に平手うちを受けてしまった。

わたしは、生れてはじめて、人からなぐられて、痛さよりもおどろきのさけび声をあげた。

この人は、すぐ外へとび出してしまい、わたしは、半時間ぐらい、白いうどんが、まるで生きものように畳を這っているのを眺めて茫然と坐っていた。

一人気ままに暮した三年間が、遂になつかしくなって来ていた。でも、その時は、わたしは、この人と結婚したことをすこしも後悔していなかった。茶袱台を倒され頬をぶたれてみて、はじめて、もうこの家の主人の位置が、わたしにはなく、この人に占められてしまった。とわかったのだ。それがさびしかったのだと思う。

わたしは、散乱した食器を片づけ乍ら、わたしの方からあやまってみようかしら、とふっと考えた。けれども、それはやはりばからしかった。

わたしの勝気がきっと人生をつまづかせると、心配していた亡くなった母なら、こういう時は、こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ちらから素直にあやまりなさい、とさとしてくれるにちがいないと思うと、はじめて、わたしの眼に泪がわいていた。それでも、あやまることには、かたくなにかぶりをふっていた。

二階にあがって床をのべた時、ちょうど柱時計が一時を報じた。

――いいわ、もう戻って来なくっても、わたしは、また一人でくらす……。

そう自分につぶやいた折、勝手口の戸が鳴った。わたしは、どきりとして夜具の中で身をちじめた。そうしてそのまま息を殺して、ぎしぎしと階段をきしませ乍らのぼって来る跫足をきいていた。

この人が、黙って自身の床にやすんでから、ものの五分もたたうちに、わたしは、バネ仕掛の人形のようにはね起きて、そちらへもぐりこみ、必死になってしがみついていた。

この人は、わたしを抱きしめ乍ら、ささやいた。

「お前は、もうおれから離れては生きて行けないのだろう、そうだろう――」

わたしは、うなづき乍らも、女に生れた自分に対してかすかな憎しみとさげすみをおぼえないではいられなかった。

(そうだ、おれは、妻にむかって、自信たっぷりにそうささやいた。しかし、あのせりふは、実は、おれ自身にいいきかせるためにはいたといえないこともない。おれは、麺類はきらいだが、のどへ通らぬほどぜいたくな人間ではなかった。結婚するまでは、すいとんと手製のパンばかり食っていたのだから。

ところが、おれは、はじめてこの家でご馳走になった時、すいとんやうどんならむしろ空腹をがま

んした方がいい、と見栄をきった手前、結婚してから、今更駄犬の舌にも等しいわが健啖ぶりを白状するわけにもいかなくなったのだ。だから、おれは、うどんを出されたのが不快で、かっとなったのではなかった。前の日、見知らぬ男名前のハガキが舞いこんで来たのが原因なのだ。勿論、おれは、妻が、たった一人でくらしていた三年間、そしてそれ以前の生活を何ひとつ知ろうともしないで、この家にずるずる入りこんでしまったのである。したがって、どんな男と交際があったか、おれの関知するところではなかった。しかし、おれは、そのハガキを手にしたとたんに、非常な不快をおぼえたのだ。いうならば、おれは、すでにすぎ去った妻の自由に対して、猛烈な嫉妬をおぼえたのだ。ハガキはその場でこなごなにひき裂いてしまった。ハガキの内容は、友人の変哲もない季節見舞いだったが——。おれは、このほとんど滑稽にちかい嫉妬を、妻に見すかされて、軽蔑を買うことをきらった。なぜなら、おれは、はじめて妻に挑みかかったさい、貴女がたとえ過去に結婚したことのある女性でもかまわない、と上づった声で口走っていたからである。……おれの愚劣きわまる嫉妬は、一瞬にして、暴力行為の中で費えてしまった。おれは、たちまちとりもどした理性で、はげしい狼狽をおぼえ乍ら、家をとび出してしまったのである)

翌日、わたしは、玄関の横の小庭を掃いている時、破りすてられたハガキの片々を見つけられたので、ひろいあつめてつなぎあわせてみた。それは、わたしのふるい友だちのKさんからのであった。わたしの脳裡で、このハガキとこの人の暴力が、すぐむすびついた。わたしは、こみあげてくる可笑しさをおさえきれなかった。

――Kさんに一度会ってごらんなさい。あの猫背の、五尺足らずのちんちくりんな醜男のKさんに――。

そういって、この人をからかってやりたかった。

この人が、稀にみるほど猜疑心のつよい小心者であったことを、ここにいる金杉彰子という娘はもちろんのこと、掛川さんもおそらく知りはすまい。

わたしは、この時は、まだ、一人そっと笑ってすませただけで、人間の気質がどんなに嫉妬に与って力のあるものか、気がつかなかった。それを文字通り骨身にしみて味わされたのは、それから十日あまり後だった。

この人は、いきなり、わたしの髪をひっつかむと、畳へねじふせて、頭を三つ四つなぐりつけておいて立ちがると、思いきりわたしの腰を蹴とばした。わたしは、歯をくいしばって、悲鳴をあげまいと堪えた。

この朝、わたしの日記を見せろというこの人の要求を、わたしは、にべもなく拒絶していた。おそらくそれが、この人の猜疑心をあふったのだ。わたしがおつかいから帰って来ると、この人は、わたしの箪笥の前で、あきらかな狼狽をしめした。この人が、日記を捜すために、箪笥の中をかきまわしていたことを直感したわたしは、この人が外へとび出して行ってしまうと、しゃんとなって、坐り直した。

わたしは、もう、はじめて殴打された時のように、ただぼんやり悲しんだりさびしがったりはしなかった。この人が戻って来たら、毅然としていようと、思った。わたしは、わたしが孤独でくらした

三年間、自分の勝気のままにふるまい、異性を近よりがたくする怜悧さをみがこうと心がけたことは、決してまちがいじゃなかった、とあらためて考え直したのである。

わたしは、ふとした心の隙から、この人に対してだけは、会った最初の日、思わず、コケットのようにふるまってしまったのだ。わたしは、時には、まるで古風な官女のようにギャラントな女になったけれど、決してコケットな女にはならなかった。ところが、この人は、わたしのコケットリィだけを受けとって、その軽薄さを組しやすしと見て、征服しようと計画し、そして成功した、と錯覚をおこしたのだ。わたしの罪だったのだ。

そう反省したわたしは、机にむかって、聖書をひらき、心を鎮めようとしたのだった。

（尚江よ、それはお前の思いすごしだった。おれは、お前の中に、すこしもコケットリィを見なかった。むしろ、慇懃（ギャラントリィ）を見た。だからこそ、おれは、お前を射落そうというこんたんもおこしたのだ。お前が、そこいらの娘のようなコケットをしめしたのであったなら、おれは、お前を征服するために殊更にあんなキザな鼻もちならない言動をしめしはしなかったろう。おれは、お前のような女に対して、思いきりあくどい露悪趣味を見せつけてやったら、どういう反応がおこるだろうという実験をやってみたのだといえる。……お前は、本当は、実に弱い女だった。お前は、ひそかに男性に愛されたいとねがい乍らも、その慇懃な冷たさを崩せない、むしろ体質的な不幸をもっていた。お前は、おれを咎めると同時におれと結婚した自分をも咎めている女なのだ。その傷痕を癒やそうとたたかう理性が、かえって傷痕をいつまでも心情の中にとどめて置く、いわば運命の冷笑をうけた女なのだ）

夜ふけてこの人が戻って来た時、わたしは、ベタニヤのマリヤが、価高い純粋なナルドの香油を、イエスのからだに注ぎかけるくだりを読んでいた。わたしは、敬虔な面紗をかぶってすっかりおちついていた。

この人は、二階へあがって来ると、わたしがきちんと正坐して読書しているのを、ひどくぼんやりした表情で、立ったまま、眺めていたが、急に崩れるように、その場へ坐りこむと、両手の指を乱れた髪へつっこんで、からだをふたつに折ってしまった。

わたしは、その如何にも苦しげな様子を見て見ぬふりをし乍ら、読書をそのままつづけた。

ナルドの香油が芳香馥郁として室にみちた時、弟子のある者が怒って、「なに故かくみだりに油を費すか、この油を三百デナリ余に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを」と非難した。するとイエスは、静かにこたえて、「その為すにまかせよ、何ぞこの女を悩ますか、我に善き事をなせり。貧しき者は常に汝らと偕(とも)におれば、何時にても心のまゝにたすけ得べし。然れども我は常に汝らと偕におらず。この女は、なし得る限をなして、わが体に香油をそゝぎ、預(あらか)じめ葬りの備(そなえ)をなせり……」

わたしは、顔をあげて、この人を見た。

こちらがもう腹をたてていないのに、むこうが自分の乱暴を詫びるかわりに、こんなに苦しげな様子を装ってみせているのが、わたしには、すこし可笑しくもあった。

わたしは、静かに立ちあがり、つとめてやさしく声をかけた。

「やすみましょう、あなた」

この人は、顔を膝にうづめたまま、微動もしなかった。

床を敷きおわって、わたしが、この人の肩へ手をおくと、
「お前、もう慍っていないのか」
そう訊ねるのも、そうやったまゝだった。
わたしは、微笑してこたえた。
「慍ってなんかいません」
床に入ると、この人は、いきなりわたしの顔中に接吻の雨を降らせた。そして、大変長いあいだ、生活の羈絆に受け納れられぬ自分の放縦な精神について、くど〳〵と弁解していたが、わたしは、まぶたをふさいだまゝ、ほとんどきいていなかった。わたしは、わたしのからだの一部分でうごめいているこの人の指さきの方を、この人の本心だと感じていた。

(だが、しかし、お前の肉体がいつの間にか微妙な反応をしめしはじめるのを、せせら笑っていたおれのざんにんさにまでは、お前は気づいてはいなかった)

わたしは、もう三度目からは、いち〳〵どんな理由でなぐられたかおぼえてはいない。ほとんど毎日殴打されていたような気がする。たぶん一週間に一度ぐらいの発作だったろうけれど、なぐられた痛みが、からだの中にぬぐい去ることの出来ない痕跡となってのこってしまったので……、今、こうして思いかえしただけの刺戟でさえもわたしの神経はもう反応をおこして、ずき〳〵と疼き出すような……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook